

ました。ここでは食糧の不足に困りました。一応缶詰などの配給はありましたが、量が全然不足しています。缶詰の内容は煙草などもあり、なかなか良く整っていますがわずかな配給では致し方ありません。我々が以前に復員した人たちが帰還の際に密かに残置してくれた食糧を夜間ジャングルより隠密に取り出して飢えをしのいだり、木の新芽などを摘んだりして生命を保持し続けました。

こうした耐乏生活の中で突如、救いの復員船米軍のリバティー船がきました。リバティー船の舷側に吊るされた縄梯子に一回我先にと飛び付きました。私は少々遅れて重いリュックサックを背負い縄梯子に飛び付きました。リバティー船の舷側は目が回るほど高く、十数メートルはあるのでしよう。それに一面に縄梯子が架かっています。なかなか上れません。辺りを眺めると私が最後尾になっています。驚いて頑張って上ろうとしますが、力を入れた足の縄梯子がスートと前に出て体を上に上げてくれません。縄梯子は沢山の人のための重量で梯子の役をなしている物だ、下の方に重さが

ない場合は梯子の役割を果たさないものと気付きました。と同時にどうしようと焦れば焦るほど、足を踏ん張れば踏ん張るほど、足が梯子と共に前に出るばかり、体は一つも上に上れないのです。手を離せば下のボートの固い甲板の上に落下、生命はありません。冷や汗がドーンと出ます。

ここまでいろいろ苦勞に耐えて、ここで最後かと覚悟を定めたとき、甲板の上から救命ロープが下ろされ、背負ったリュックサックの一端に結びつけ、引き揚げられてやっと甲板に上がることができました。最後の最後まで命懸けの私の戦務でした。

懲罰大隊記

神奈川県 牛窪 剛

私は大正十四年八月、現在の海老名市、昔の有馬村で生まれました。そして吉祥寺というお寺で育ちました。長兄が住職をしていましたので、小学校六年卒業

後僧侶の修業を積んでいました。長兄はまた教職にありましたので、短期現役で麻布第三連隊に入り、有名な二・二六事件の直前に除隊し、その後は召集はありませんでした。

次兄は甲幹で参謀本部の少尉で終戦を迎えて、兄弟三人共無事でした。父は佐渡金山の別当職の子孫で、山伏の修験道の研究家で、先達の指南役をやっていたましたが、私の入隊前の昭和十七年に亡くなっています。徴兵検査は昭和十九年春に下検査、秋に本検査の二

回受けて、プールで潜水させられゴールまで潜りっ放しだったら甲種合格になりました。入隊までは日産自動車の本社輸送課に勤めていました。昭和二十年一月、本籍地である新潟県の新発田連隊に入隊、直ちに朝鮮に渡り羅南師団の会寧第七十五連隊に移り、間もなく名称変更になり第七十九師団歩兵第二九〇連隊(奏二一一五三部隊)歩兵砲中隊となり、一期の検閲を受けたのが昭和二十年五月初旬です。

朝鮮軍司令官は板垣征四郎大将、師団長は太田貞昌中将、連隊長は今堀元貞大佐、中隊長は安富中尉でし

た。私の中隊は昭和十三年にあの有名な張鼓峰事件で全滅しています。初年兵は全部新潟県出身者、二年兵は新潟出身と現地入隊者と朝鮮出身者の混成です。朝鮮出身兵は優秀な人が多かったようです。終戦と同時に姿が消えていました。三年兵は沖繩転属で一人もいませんでした。

私らが渡鮮するころの関釜連絡船は危険になりましたので、博多と下関と二手に分かれて乗船しました。海軍の護衛はありませんでした。

幹部候補生は受けませんでした。上官からは将来士官学校に入れと言われていました。私の職業は僧侶となっていたので、幹部教育中、過労で肺炎になり死亡した兵の葬いに私が呼び出されたこともあり。一期の検閲後まもなく山に入って布陣態勢に入りました。

布陣とは対ソ戦を予想しての陣地配備に入ることなのです。教育も猛烈でした。ピンタも相当もらいました。僧侶の身にあったこともあって、他の人に比較すると相当軽かったと思います。それに私は入隊前、

陸上競技が得意で、一万メートルも三十三分とか、幅跳びは約六メートルくらい、高跳びは一メートル七〇を跳んでいました。それで演習でも終了したら兵舎まで早駆けをやらされましたが、私は一番先に着いていました。すぐに巻脚絆を解いて固く巻き、上に投げ上げても崩れずに落ちてきます。他の人は崩れてぐだぐたになり罰を受けていました。夜間、非常呼集がかかり、外に整列するのも他人に負けませんでした。

一期の検閲が終わった段階で、私の序列は連隊で二番でした。検閲後、歩兵砲訓練の傍らガス教育を受けました。山へ入って間もなく、今までの兵舎が昔ロシア人が建てた立派な建物だったのですが、対ソ戦が始まると格好の目標になる恐れがあるとのことで、火をつけて全部焼き払ってしまいました。煉瓦造りの建物は爆破してしまいました。

山の陣地に入るときには病弱な兵隊の中には「ついてゆけないから手榴弾をください」と申し出て隊から離れた者が二、三名あり、しばらくすると遠方でドーンと破裂音がしました。

山の中ではテント暮らしです。北鮮の山は落葉松が多く、演習のとき、砲火で火事になり消火に走り回ったものです。中隊の装備は半減され歩兵砲、速射砲各二門になりました。部隊の食糧庫は小学校を利用していましたので監視に行くのですが、その監視に出されたとき、三名のうち一名が行方不明になるくらいに治安が次第に悪くなったようです。

七月ごろ、内地から新兵が来ましたが、服装が貧弱なのに驚きました。九九式の小銃は新品を持ってきましたが、木部の仕上げが粗末で、トゲが刺さるかと思うくらいにザラザラしていました。そのころになると、何かと多忙になり、新兵の教育はないまま陣地に配備されたようです。

八月九日、ソ連軍が東海岸の清津を攻撃して上陸したとの情報とともに、ソ連機が単機で飛来して旋回しながら機銃掃射を加えてきました。

遙か東方の清津方面を眺めますと、戦車の来攻を知らせる砂煙が見え、「いつくるか」と待ち構え、陣地配備も一層嚴重にして待ち構えていましたが、敵は道

路を進むだけで我が陣地のある山を避けて行きました。

通信隊の見習士官が八月十五日のラジオを聴いて大隊長に報告して殴られたとの噂が飛び、また停戦協定が結ばれたとの話やいろいろな情報飛び交いました。そうこうしているうちに二週間が過ぎ、八月の末ころ「凶們（満州間島省）」に集合せよと命令が下り、山を下りて凶們に集まったら「武器を並べろ」と言われ、はじめて武装解除を知った次第です。

私は歩兵砲を馬に挽かせてきたのですが、遙か地平線のかなたに人影が豆粒のように見え、盛んに手招きしているのを見て「これは満人が馬を捕えにきているな」と思い、馬に「元気で暮らせよ」と言って尻を思い切り叩きました。馬は一目散に走り去って行きましたが、その後どうなりましたか。待ち構えていた満人にかわいがってもらえることを祈るだけしかできない身を惜げなく思いました。

凶們では馬蹄形の崖に囲まれた地域に何万もの兵隊が集結して次の命令を待ちながら野宿していました。将校は佩刀してましたが兵隊は丸腰でした。通信中隊

長が「ガスがそのうち流れてくるぞ、そしたらあの方へ逃げろ。こちらには機関銃があるようだから気を付けろ」とか、いろいろと話をしてくれました。

そのうち「将校は延吉に集合。列車が出る」。そのころ師団長、連隊長らの姿はいつとはなく消えていました。私は将校当番代わりに将校と同行を命ぜられ延吉に到着、煉瓦造りの建物に入りました。軍の中佐参謀が台に上り、「このような不始末は、我々参謀の作戦失敗の責任だ」と涙を流して謝罪しました。その後、私たち兵隊は将校と別れて軍司令部の下士官集団に組み込まれました。そして半地下式の兵舎に入ったらウイスキーの飲みかけの瓶や、湯呑茶碗の上等なものやら、食糧庫にはパンやお茶など欲しい物がいっぱいあるのですが、ソ連兵が押さえているので仕方なく腕時計と交換したんですが、同僚とそこに居を構えたのです。

十日くらい経って、千人単位の作業隊が編成され、どこともなく徒歩行軍で出発しました。ソ連将校と警戒兵が同行しました。私は殿行でした。初めのころの

作業隊だったので行く先々の道の両側には農作物が実っていたものですから、列から離れずに手を伸ばせば届くので手当たり次第に「モギトリ」、食糧の足しにできた点は幸いでした。あとの隊になるほど列から離れなければ手に入らなくなり、そのため、逃亡と見なされ同行しているソ連の警戒兵に撃たれて死ぬ兵隊が続出するという悲劇が展開されたのでした。私は列の殿りにいたのでソ連兵と片言交じり、ジェスチャー交じりに話すうちに何とかロシア語を語れるようになったのは幸いでした。

途中、野宿しながら行軍中に雨が降ると、携帯天幕だけでは駄目で毛布をかぶって寝るのですが、それでもズブ濡れになり、二人で毛布を絞って乾かす始末でした。

ようやく琿春こんしゅんに近づくとも猛烈な屍臭に襲われました。近くを見回すと形ばかりの土饅頭が延々と続き、戦死者が葬られていたのです。半日くらいかかってやっと琿春を通過しました。どうも寝込みを襲われた模様で防毒面が無数に散らばっていました。塹壕の中には

武器も置き去りになったままで無惨な状況でした。

琿春を通過してソ連領内に入りポセットの海岸に着、海を見て日本へ帰れるぞと喜びました。ポセットの丘で夜営して貨車輸送の始まるのを待つ間に、前途の苦難に絶望した獣医下士官が昇永水を飲んで自殺する事件がありました。

有蓋貨車に乗せられ、貨車は「トキーヨー ダモイ」(東京へ帰る)の期待を裏切って北上し、ハバロフスクの北方のコムソリスクに到着しました。さらに収容所までは途中一泊しながらの行軍の末、ホルモリン地区二〇一収容所に到着しました。建物が四棟ある割合と整備された施設でした(ドイツ兵が入っていたらしい)。

翌日から直ちに道路普請の作業をやらせられ、続いて三キロくらい歩いて木材伐採の作業につかせられました。当時の被服は夏服のままです。食糧は粟のカラ付きのまま炊いたものでした。粟の殻付きの飯を食べますと、便が詰まって苦しみました。蹲んで尻を丸出しにした列を作り、前の人の肛門に指を突込み「ホジ

クリ、便を掻き出してやる作業を毎日繰り返し返しました。

今、思い出しても本当によく生き延びたものだ、つくづく思います。栄養失調になると足が上がらなくなり、シベリアでは樹の根が下に伸びずに地上に這い伸びるのです。それにつまづいて転ぶのです。「集合」がかかると転ぶ姿が、あちこちで見られました。

定期的に体力検査があり、一級はノルマの二二〇パーセント、二級は一〇〇パーセント、三級は八〇パーセント、四級はオーカーといって軽作業です。女の軍医が裸になった日本兵の尻の肉をつまんて弾力の強い者は一級とランク付けするんです。私は常に一級ですからノルマの二二〇パーセントを課せられました。

十一月になるとみなが餓鬼道に入りました。お互いの不信感がつり、会話が荒っぽくなり、大豆が浮かぶ塩スープの配給に目を皿のようにして監視する姿には過去の日本人の誇りも消え失せて、自己本位の餓鬼道に落ち込んでいきました。マイナス二〇度くらいま

では夏服のまま、ソ連製の皮のシューパーが支給されたのは十二月に入ってからでした。私が体験した最低温度はマイナス六五度でした。

昭和二十一年四月ころから民主化運動が始まり、アクチブにより民主教育が夜、開かれ、参加するように勧められました。私は「何がデモクラシーだ、俺は日本人だ」と頑固に拒み続けて独り横になって体をやすめていました。ソ連将校と日本の大隊長が来て「集合に出ないと懲罰大隊行きになるぞ」と脅かされました。

牛糞は懲罰行きになるらしいと噂が広まるにつれて、次第にまともな作業はやらせてもらえなくなり、雑仕事ばかりが回ってくるようになりました。ある日、天井の左官仕事を命ぜられ、日活俳優の滝口新太郎兵長と組んで天井塗りを始めたのはよかったです。下の目が粗くてなかなかうまく塗れずまいりました。私が脚立に乗り、滝口が材料を下から差し出すわけですが、非力な滝口は一度に多量の材料を差し出せず、そのため何度塗ってもハガレてしまって困ってしまっ

たことは今でも忘れられない一つの思い出です。

二十一年春までが最も厳しく、地獄でした。寒さ、飢え、重労働の三重苦にあえいでいました。

昭和二十一年九月、とうとう反動分子のレッテルを貼られてホルモリンの懲罰大隊にプチ込まれました。魔のバム鉄道建設隊です。

ここは囚人だけの作業隊ですから今までのカンボーイ（警戒兵）はいません。代わって囚人の監視役（ボンポベイド）と（バタフライ）という総指揮官がいて、労働時間は朝星、夜星という長時間の労働です。夏の朝星、夜星の長いことはたまったものではありません。日本人は二百人くらいいました。宿舎は有蓋貨車の内部に二段の棚を作り、これが住まいです。唯一の救いは日曜日の労働なしでした。

作業中に付近の住宅や農地を探しておいて、日曜日には子供らと遊んだり、農地に夜間忍び込んで野菜を失敬して食糧の足しにしました。収容所ではマイナス三〇度で作業中止でしたが、懲罰大隊では寒気に関係なく作業続行です。私の体験ではマイナス六五度の印

象です。万物が凍ってしまおうとこんなにも静かなんだが偽らざるところです。オーロラも見ました。シラミもこの寒さではいませんでした。入浴は覚えがないからなかったと思います。たまに川に出くわすと顔を洗うくらいでした。私は他人から見ると一見サボッているように見られ、殴られたり蹴られたりしてその点では損をしました。広島県の人で義勇隊出身の田口さんという優秀な人に陰になり日なたになり、助けてもらいました。露語の達者な人で我々をかばってくれました。

二十一年九月から二十二年八月までの一年間、鉄道建設で苦勞しました。九月に入ったある日突然、「牛窪は政治経済講習所にゆけ」といわれ毎日一室に缶詰にされ、いわゆる民主教育を約四カ月間詰め込まれました。

そして二十三年一月、二〇五収容所に移り、そこでいきなりアクチブの幹部にされ、情報宣伝部長として壁新聞の製作に携わっていました。境遇の急変に面食らった連日でした。

時々外部の作業にも出ていました。五月初旬、たまたま道路作業に出ていた私に対して、昼食を運搬中の馬車にのっていた日本人が、何か大声で呼び掛けていきましたが、意味が分からずそのまま作業が終わり、帰るとトラック一台に日本人約二十名が乗り込み私を待っていたのです。急にダモイ第一陣に選ばれたのでした。

「ダモイだから早く乗れ」喜び勇んで別れの挨拶も上の空で貨車に飛び乗りました。中間集結地に着き列車でナホトカに着いたのが、昭和二十三年五月十日でした。早速ナホトカの民主主義者が来て「私たちの手伝いをして欲しい」と頼まれましたが体よく断わりました。また「金を寄付して欲しい」「金なんか無い」「では働いてくれ」働いたら船に乗れなくなるから、これも断り、「英徳丸」に乗船しました。船中で乗船名簿を邦文、ローマ字の二通りで八部ずつ作成して復員官の海軍中佐に手渡しました。船酔いで鉢巻きしての作業でした。その他に現地のいろいろな覚え書きも要求されたので書いて提出しました。

昭和二十三年六月一日の朝、舞鶴に入港、約三年ぶりに祖国日本に帰り着き感無量でした。上陸早々、D Tを頭から吹き掛けられ真っ白になりました。間もなく米軍に呼ばれ、鉄条網に囲まれた大きな建物の入口には白と黒の衛兵が立っている所に入りますと、室内の壁一面にソ連の大きな地図が貼ってありました。

米人将校と日系二世の兩人からシベリアの私がいた所や通過した方面の状況を尋ねられました。チューインガム、チョコレート、コココーラ、タバコなどをすすめられながらいろいろと質問をするわけです。最初私が黙っていると「シベリアに戻ってもらいますよ」と脅迫するのです。「あの川に架かっている橋の形はどうでした?」「貴方がいたコムソモリスクの丘からどんなものが見えましたか?」「無電塔がありましたか?」(事実無電塔がありました)。四十分間の尋問が終わると、再び別な所から呼び出しがあり、別な米人から尋ねられました。たしか三回くらい呼ばれたことを覚えていますが。いろいろ考えると、先に帰国した連中が同様な尋問を受けた際に「牛窪が幹部だから彼ならよく

知っている」くらいのことを話したのだろうと推察しました。

私が帰宅後三年間は、届いた郵便物は、全部開封したしるしのセロハンが貼ってありました。

私は二十三年に帰った集団は「アカハタ軍団」と呼ばれ、全員赤化思想の持ち主と思われ、就職は非常に困難でした。私も日産に復職できたのですが、簡単に断ったら、他の就職口は全部断られ、五年間全く収入ゼロの状態で困りました。やっと二十八年に東急に入社できて助かりました。

留守宅との連絡は在ソ中に一回だけ俘虜郵便でハガキを出したのが家に届いていましたが、家からの手紙は届きませんでした。私が生きているのだけは母も分かっていたようです。帰国の通知は別にしませんでしたが、ラジオで聞いた人が母に知らせてくれていたそうです。

在ソ中、仲間に届いた父からのハガキに、墨書きで「待つ」の下に蛙の絵が書いてあるのを見せられたことがありましたが、蛙は「カエル、帰る」を意味して

いたのです。当時はシベリアボケでなかなか意味が分からず、皆で相談したこともありました。

二十一年の春ころまでは暗黒の日々でしたが、死んだ戦友の葬いも何もできない中で、黒パンの小片とタバコの粉を焼香代わりにして読経してあげましたが、現地訪問しても現在となっては埋葬した所も全く不明です。

シベリア抑留につきまとう日本人同士の密告は他ではあったそうですが、私のいた所では全くありませんでした。

二〇一収容所にいたとき、ある日曜に冬季用の薪取りを全員でやったとき、一回だけのはずが五回も要求されたので全員が怒り、門の前に坐りこんで拒否しましたら、ソ連幹部が出て来て「ソビエトにはストライキはありません」と脅しました。そして全員が結束してさらに拒否しましたら、収容所側があきらめて開門し、その後の処罰は全くなく、無事平穩のうちに決着しました。五十二年後の現在、あの時を振り返ると再びあのような悲惨なことはあって欲しくないと思います。